



森野昭

□ 昆明からシーサンパンナへ（1日目）

わたしは、中国滞在8年目にしてはじめて春節休暇中に日本に帰りませんでした。今度こそ中国生活最後となるであろうと思い、昆明にとどまり雲南生活を楽しもうと考えたからです。

そんな中に、江西師範大時代の教え子である黄誉婷さんと簡紅梅さんが昆明に遊びに来たので、かねてから計画していたシーサンパンナへ三人で旅行しました。そこは、ミャンマー・ラオス・ベトナムと国境を接している中国最南端にあります。昆明は南国にありながら1,900メートルの高原地帯にあるために、「春城」（常春の町）と呼ばれていますが、12、1月にはやはり朝晩冷え込み、冬到来の気配があります。しかし、シーサンパンナは熱帯ですから、冬が観光旅行のベストシーズンです。

上海から37時間かけて汽車でやって来た黄さん（上海外大の院生）と、南昌から飛行機でやってきた会社勤めの簡さんが、1月22日に昆明で合流しました。

翌日、昼食に雲南名物「米線」（ミーツン；米で造ったラーメン）を食べました。米線は学生食堂なら4元（約60円）で食べられますが、本格的な米線は、熱いスープと麺、色とりどりの具が別々に出され、順番にスープに加えて食べます（30元＜約400円＞と豪華！）。

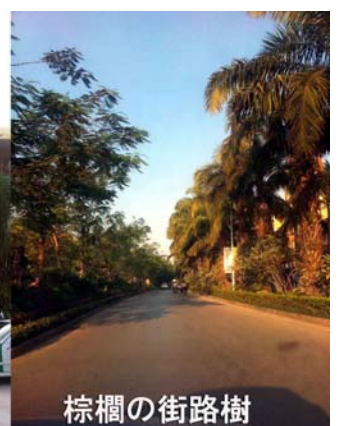
午後、4時半に飛行機で出かけました。

シーサンパンナへは鉄道が無く、バスなら10時間、飛行機なら1時間です。バス代が255元（3,400円）に対して、航空券代はインターネットで予約すれば280-300元（空港利用税込みで3,800-4,000円）とさほど高くないので、往復とも飛行機を利用することにしました。

寺院を思わせるシーサンパンナの空港に降り立つと、湿度の高いムツとする暖気を感じられました。景洪市のホテルへ行く道々には南国特有の街路樹が見られ、「いよいよ南国へ来た！」という気分になります。

予約したホテルはツインルームが160元（2,200円）と安い！ちなみに、私は一つのベッドを占有し、二人は一つのベッドと一緒に寝ます。

さっそく、夕食を摂りに有名なタイ料理のレストランへ行きました。





タイ料理レストラン

炊鍋 **羅非魚** **パッパル炒飯**

羅非魚 地方の特色料理と聞けば、食材はその土地の伝統産品が使われていると思いがちである。羅非魚は昆明でも雲南料理として食べたことのある白身の魚である。ところが、この魚は、1970年代に湖北省へナイルティラピアが導入され、ナイル（尼羅）とアフリカ（非州）という中国語から「羅非魚」と命名された。現在では、中国南方で養殖されて、一般的な食材となっている。それが、シーサンパンナの主要な少数民族タイ族（中国語では、「傣族」と書く）の料理にまで使われているようだ。タイ族ウェイトレスの橙色の民族衣装が印象的。これなら、現代っ子の茶髪も服装の色に合っているか？

□ 熱帯植物園へ（2日目）

景洪市から熱帯植物園までバスに乗った。途上窓外にはバナナ園が広がっていました。1時間半で着いてから、さっそくホテルを予約した。60元（800円）と格安でしたが、ただし、間もなく始まる春節（旧正月）の時には十倍の価格に跳ね上がるそうだ。今日もタイ族の郷土料理を昼食で摂りました。また、魚は羅非魚でした。



店を出たら、男性が将棋をしていました。中国将棋のルールは日本将棋とは異なるそうですが、将棋盤の中央境界に「河界、河界」と書いてあります。黄さんの説明によると、境界線に「楚河、漢界」と書くのが正式で、秦末に項羽と劉邦が覇権を競い合った故事にちなんでいるそうです。庶民の遊びにも伝統を感じさせて面白い！

植物園へ歩く途中に、「麻薬撲滅キャンペーン」の横断幕がありました（右下の写真、「毒」とは麻薬のこと）。ここシーサンパンナは国境を越えて運ばれてくる麻薬の密輸ルートになっているそうです。

熱帯植物園



A : 果実がソーセージ型をしていることが俗称の由来。この樹はタイ国の「国樹」になっているようだ。

B : 王維の有名な詩「相思」の起句にあるように、「紅豆がここ南国（シーサンパンナ）に生えている」ことを知って、私は格別な思いがした。紅豆は光沢のある鮮紅色をしているとても硬い実で、女性の首飾りや腕輪に使われている。長安大時代に劉トッさんと旅行したときに、彼女が紅豆の首飾りを買ってつけていた（写真参照）。結句にあるように、昔から「相思相愛」のシンボルとされてきた。紅豆はエンドウ豆のようにサヤに収まっており、実が熟してからサヤとわかれて地面に落ちるようだ。だから、相思樹を見上げてもなかなか紅い色の紅豆を見つけることができなかつた。拡大写真を注意深く眺めて、ようやく赤い実（紅豆）を二つほど見つけることができた。承句にあるように、紅豆は春に熟して摘み取り期となるのなら、シーサンパンナには1月末で早や春が訪れているのだろうか？

王維作「相思」

紅豆生南国、 紅豆南国に生じ、
 春来發幾枝。 春来たりなば幾枝を発す。
 願君多采擷、 君に願う多く採りて擷（けつ）せよと、
 此物最相思。 此物最も相思なり

（意訳：南の国に生い育ち 春 幾枝にも実を結ぶ 紅い豆は恋の花 摘んで思いを实らせよ）

C : この「相思樹」は、幹が二つなのに根の部分が合体しているので、深い夫婦愛を象徴するものとして、シーサンパンナの人々から愛されている（翌日訪問した「望天樹」の森にあった）。結婚以来 40 年、「臺が立つ」夫婦関係にある私は、いつの日にかここへ妻を連れて来るべきか？

D : 王子の地位を捨てて人生の心理を探した釈迦がこの樹の下で悟りを開いたと伝えられる（インドボダイジュ）。日本の菩提樹は臨濟宗の栄西が中国から持ち帰ったもので、異なる種である。また、シューベルトの歌曲で有名な樹はセイウボダイジュでやはりこれとは異なる種である。

E : 釈迦がこの花の咲く樹の下で生まれた。シーサンパンナの small 乗仏教を信仰しているタイ族は、この樹が「吉祥の象徴」と信じており、ほとんどの村の寺にこの樹が植えられているという。



熱帯植物園は河に囲まれて一つの島のように感じられるらしい。私たちは歩いて植物を見学しかけたが、植物園の広さに驚いて観覧車に乗ることにしました。観覧車で主要スポットまで運ばれて、散歩し、また観覧車に乗る——そんなやりかたで、約3時間でまわることができました。写真に納めることの出来た植物は数限りなくあったが、いちいちご紹介することはできません。

ホテルに戻って、夕食は「火鍋料理」にしました。



火鍋は四川料理が本場ですが、今や全国各地にあります。シーサンパンナでの最初の夜にタイ料理店で食べた炊鍋（すいか）も類似の鍋料理で、鍋の中央の煙突の中に入れて炭火で熱する仕掛けになっています（右上図）。

火鍋の「鍋」は通常隔壁で仕切られており、激辛と普通の辛さの二種類を食べ分けることができます。この日に食べた火鍋には隔壁がありませんでした。

中程度の辛さだったのに、半時間後にはトイレに駆け込みました。ちなみに、そのレストランのトイレは「ニーハオトイレ」（右図）でかなり汚いのですが、お尻から下痢便が噴出寸前なので仕方がない！ こんな程度のトイレに驚いては、中国の地方へは行けません。



日本人観光客は、中国で五星ホテルに泊まり、旅の途中も綺麗でドア付きのトイレのある休憩所に案内されます。そんな「大名行列」並みの殿様観光では中国の実態が（良さも悪さも）永遠に分からないでしょう。

□ 望天樹の空中走廊（吊橋）（3日目）

熱帯植物園からバスで1時間半、バスに乗り換えて40分で望天樹につきました。昼食後、湖（河？）の遊覧船に乗ったがつまらなかった。そこで、さっそく望天樹へ行きました。ハニ族の歓迎の踊りを見た（ただ竹を床に打ち付けるだけでしたが）。聞くと踊り子はみな漢族だとのこと。「空中走廊」のある山に入りました。



「望天樹」は熱帯原始林の代表的な植物。樹高 80-100m、幹の直径 1-2m（意外と細い！）で、樹幹は真っ直ぐ伸びて枝がなく、樹頂に枝葉が茂っている。見上げると樹冠は雲にも届いているかのように思える。

「空中走廊」は望天樹の上部数十メートルに太い鉄索とロープで樹間を結んでいます。総延長 2.5km とありますが、私が歩いた印象では 500m 程度に思われます。しかし、両手で交互にロープを握りそろそろ歩いていても、吊橋が揺れて脚がすくんできました。俯くと底板の間から千尋の谷を見ているような恐怖感、前を向くと吊橋が樹間を巡って延々と続いており何時降りられるのかと不安になる。天を仰ぐとコバルトブルーの空から熱帯の太陽が照射して目眩がしてきます。ところが、黄&簡両嬢は「ちっとも怖くありません！」と言って、すいすいと先に進んでいきます。私ははじめて、自分が「高所恐怖症」であることを思い知りました。

上の写真で私は微笑んでいますが、被写体としての見栄です！でも、歩いているうちに、恐怖心は少しだけ薄らいできました。わたしは、昔、ディズニーランドの「スペース・マウンテン」に乗って死ぬような恐怖を感じて以来、遊園地のジェット・コースタには絶対乗らないことにしていますが、「空中走廊」も二度と渡りたくありません。

一体全体、このような「吊橋」が何の目的で造られたのでしょうか？

わたしは、日本の僻地にあるような、深い谷川の兩岸の村人が往来する目的でつくられた吊橋を想像しました。ところが、観光案内処の係官に訊くと、植物研究者が望天樹の科学的調査の目的で造ったものが、後に観光の目的に転用されたのだそうです。なるほど、「高所恐怖症」の私のような人は別として、熱帯雨林の大ジャングルの中を「空中散歩」できる快感を与えてくれるのは、観光地としてはとてもユニークです。

前頁の写真では、「空中走廊」の高さが分からないので、インターネットで紹介されている写真を引きます。



「空中走廊」の登り口に「高所恐怖症」「高血圧」「高齢？」「身体障害」の方々はご遠慮下さい、との看板があった。嗚呼、もし私が蝶々か猿だったら、眼下に見える樹冠あたりの枝葉の上にヒラリと舞い降りてみたい！

これで、二日間のシーサンパンナの観光は終わりました。ここの観光地としては、他にも、「野象の谷」「熱帯原始林」「タイ民族村」など多くの訪問地があります。が、象がいつ森から出てくるか分からない、俗化されていて観る価値が少ない、などの理由で行くのを止めました。旅行社の企画したバックツアー旅行なら、多くの観光地へ効率よく案内してくれるようですが、数をこなすだけで自由がなくて食べ物もマズイ、しかも行きたくもない土産物屋に何度も連れて行かれたりして不満が多いのです。個人の旅なら、バスの乗り継ぎなどで時間がかかるので行き先が制限されるが、気の合った友人同士の気ままな旅に勝るものではありません。しかも、何時何処でも、美味しい食べ物を腹一杯に食べられます。黄さんなんか、「また肥ってしまうわ！」と何度も嘆きながら、モリモリ食べていました！

シーサンパンナ最後の晩は、屋台のバーベキューを食べることにしました（次頁を参照されたい）。

□ シーサンパンナから昆明へ（4日目）

朝、郷里への土産物として果物を買うことになりました。シーサンパンナには果物が豊富です（次頁を参照されたい）。昼前に発った航空機は約1時間で昆明に着きました。

南昌市で衣類製造の会社に勤めている簡紅梅さんは、昆明市から車でゆくり帰るつもりだったのに、上司から「仕事ですぐに帰るように。航空機代は会社が払う」（結局支払われなかったそうですが）と急かされて、昆明の我がアパートに一泊しただけで帰ることになりました。仕事で上司に頼りにされているのは会社員として幸せなことですが。しかし、彼女は仕事で日本語を使う機会が無いらしく、3年前の江西師範大の学生時代より、日本語会話力が低下していました。語学の宿命として仕方のないことです。一方、上海外大・大学院生の黄誉婷さんは、長い春節休暇中なので我が家に4泊してから故郷・贛州市（ガソウ；江西省の南部の町）に帰りました。

黄さんは陳亜雪さんと共に、江西師範大時代には私の中国語の家庭教師として親しく付き合い、旅行を何度もしました。一方、簡さんは普通の学生で私と特別の付き合いはありませんでした。しかし、別れてからも時々メールで交流しており、今回、雲南旅行をするので私に会いたいと言ってきました。私には、これまでの5大学で教え子は五百人は下らないでしょう。卒業後、一切の連絡を絶っている人とは会わないことにしています。が、彼女のように私を忘れないで慕ってくれている教え子は別です。

今回の三人旅はとても楽しいものになりました。

(了)



中国では、飲食店の前の路上に粗末なテーブルが置かれて、屋外で食事する光景がよく見られる。シーサンパンナではこの時期、夜ともなれば、屋間の暑さが引き、暑からず寒からずで、快い微風の中で食事するのが最適。この日、満天の星空に満月が皎々と輝いていた。



装点摊头的各种各样的热带水果 店先を飾る色とりどりの南国の果物